

「感謝経済」をめぐる“風景” 1

～250年前に“経済学の祖”アダム・スミスが指摘していた“感謝経済”の源流～

「人間社会のすべての構成員は相互の援助を必要としているし、同様に相互の侵害にさらされている。必要な援助が、愛情から、感謝から、そして友情と尊敬から、相互に提供される場合は、その社会は繁栄し、そして幸福である」(アダム・スミス「道徳感情論」 水田洋訳 岩波文庫より、下線は本コラム筆者)

これは、“経済学の祖”と言われる、イギリスの経済学者(哲学者、倫理学者でもある)アダム・スミスが、今から259年前の1759年に著した「道徳感情論」の一文である。(「道徳情操論」とする訳もある)

アダム・スミスといえば、「国富論」(「諸国民の富」)の著作が有名で、大学の経済学部の1年生は講義などで必ず勉強する、「経済学の”古典”」「必修の教典”」「入門書“のようなものだ。その「国富論」(1776年)で有名なフレーズは、「見えざる手(invisible hand)」(一部で「神の見えざる手」とする向きもあるが、スミスは「神の」という表現は一切使っていない)であり、これは簡単に言うと、多くの人々がお金持ちになりたいとその金銭欲、欲望に動かされて事業や経済活動を始めると、それに関連して様々な経済活動が惹起され、さらに結果的に雇用も生まれ社会に波及し、それぞれの部分で市場メカニズム(需要と供給にもとづく価格調整などのメカニズム)が働き、ひいては、経済活動の大きな枠が生まれていく、というものだ。

ここで重要なのは、“儲けたい”という個人の金銭的、富を得たいという局地的で社会全体と一見関係ない動機で始まる経済活動や事業が、社会全体を第3者的に俯瞰してみた場合、事業家の意図するしないにかかわらず、「見えざる手」に導かれるように自由につながりながら経済活動全体に波及し、経済成長が起きていく、というものである。これは、経済活動において、すべてを権力や政府が規制をもとに縛っていく形とは異なるので、ここに“自由主義経済システム”“自由競争”の根源的理論の基礎との解釈が生まれ、“自由主義経済”を主眼とする近代経済学の源と見なされている。

このアダム・スミスの“経済学古典”が19世紀、20世紀、21世紀と近代経済学の理論の発展の中で、一面だけ見た傾向的、時によっては恣意的に解釈され、いわば「進化」した(場合によっては「退化」なのかもしれない)形、“弱肉強食”“拝金主義的”な経済思潮の正当化につながった可能性が高いという想像は禁じ得ない。経済学史の専門家でも意見が分かれる。(「アダム・スミスが自由競争の大元だ」「いや、アダム・スミスの本旨は違う」etc.)

しかし、本コラムで指摘したい最も大事なことは、アダム・スミスの主張、分析や考察について、それらを個人の欲望や金銭欲に駆られて行う経済活動がすべてである、という風に単純に受け止めることは絶対にできない、という点である。冒頭に引用した「道徳感情論」は、経済学者であると同時に哲学者、倫理学者として、徹底的に社会の秩序には、“人間の心”が深く関与している、という思想を端的に示したものだ。

「国富論」(1776年)を著す14年前に示した「道徳感情論」で、強いメッセージで通奏低音のように貫かれているのは「相互の援助の必要」であり、「愛情」であり、「感謝」である。

「道徳感情論」では、社会の秩序の大事な要素には「共感」「同感」(sympathy、シンパシー)があり、他人や自分の行為や感情を、公平に中立的に評価できる、評価すべき作用や枠組みがないとならない、というものである。

同時に、スミスはフェアプレイの精神も重視し、事業を発展させたい、儲けたい、という野心があっても、フェアプレイを無視したり、他者を投げ倒したり、押しつけるだけの競争は許されない、とも主張している。

それはつまり、経済発展には、「同感」「感謝」「相互の援助」の哲学的な根本原理、さらにはフェアさも必要だ、としているのである。

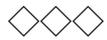
こうしたことを考えると、古今東西、特に近代国家が醸成されていく18世紀以降の近世、近代、現代、そして21世紀にわたるまで、富をめぐる国家間の争いが戦争にもつながり、権力者や為政者の地位や名誉、プライド、保身などが、富(経済)を絡めた様々な権力闘争や闘争につながり、虚偽、賄賂、陰謀、暗殺など、様々な、人間としての”異様で異常な暴挙“とともに存在してきた。

21世紀の今、世界は成熟し、ようやく、自由主義競争の経済だけでは、社会や人々の持続可能性を担保できないということに気が付き、環境や社会的責任、社会貢献などの要素も経済活動の評価の大きな軸となってきた。

従前の経済合理性だけに主眼を置いた経済学、経済政策や社会分析だけでは、もう新たな次元の政策提案、次の発展はできないという観点が重視され、行動経済学なども注目されている昨今、あらためて、“経済学の祖”アダム・スミスが250年前に主張した「相互の援助」「感謝」「友情」「尊敬」「共感」をいかに経済/社会のシステムに取り入れていくか、それを何とか模索できないか、この点がすべての為政者、経済人にも求められていると思うのである。

【株式会社オウケイウェイヴ ミッション (企業理念/目的)】

互い助け合いの場の創造を通して、物心両面の幸福を実現し、世界の発展に寄与する



株式会社オウケイウェイヴは2018年4月、より多くの人々が活躍できる社会を目指した新たな経済圏『感謝経済』の考え方と、その実際的な経済活動具現化のためのプラットフォームを開発した。

この試み、新たな概念の事業が注目されている中、私、OKWAVE 総合研究所所長の大山は、株式会社オウケイウェイヴの社員ではあるが、同時にシンクタンクの研究者・代表として、できるだけ中立的に、「感謝」と「経済」、「互い助け合い」と「経済」の在り方、新たな社会と経済の在り方などを、月1回のペースで、「感謝経済」をめぐる“風景”と題して、コラムを連載し、所感や考察などを示していく。